

中間評価結果

大学名	帯広畜産大学
研究施設名	原虫病研究センター
拠点の名称	原虫病制圧に向けた国際的共同研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

国内・国際的に問題となる家畜原虫病の診断・予防・治療技術シーズを、各原虫の自然界でのライフサイクルを再現した実験系（オーセンティック・インフュクション）を活用して発展させ、国際基準となる原虫病対策技術の開発研究を推進する。

2. 総合評価

（評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

（評価コメント）

共同利用・共同研究拠点として、人獣共通の原虫病に特化し、優れた成果を上げるとともに、国際共同研究や発展途上国における人材育成など、関連分野の発展に向けて積極的に国際連携活動を展開している点が評価できる。

今後は、原虫病学の更なる推進に向けて、ゲノム科学手法の導入や、明確な研究目標の設定とその達成に向けた戦略的研究課題の導入などの方策について検討を行うことが望まれる。

中間評価結果

大学名	筑波大学
研究施設名	遺伝子実験センター
拠点の名称	形質転換植物デザイン研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

当該研究拠点は形質転換植物研究を総括的かつ先導的に実施し、当センターが有するトップレベルの形質転換植物開発研究技術・設備・ノウハウと国内研究機関がこれまでに蓄積してきた植物基礎研究を融合することで、形質転換植物に関する学術研究を推進すると共に実用化候補作物の作出に向けた研究・評価・管理技術の開発と効率化を実現することを目的としている。現在、センター長の下に6研究部門と1支援部門を置き、共同利用・共同研究を推進している。

2. 総合評価

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として、特殊な施設を整備し、形質転換植物デザインに関する世界トップレベルの研究成果を継続的に上げている点が評価できる。

今後は、共同利用・共同研究拠点としての位置付け・役割を一層明確化し、より全国の関連研究者コミュニティに開かれた運営に努めるとともに、遺伝子組換え植物に対する国民の理解醸成に向けた取組を充実させていくことが望まれる。

中間評価結果

大学名	東京大学
研究施設名	大気海洋研究所
拠点の名称	大気海洋研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

大気海洋研究拠点は、海洋と大気に関する基礎的研究およびそれを基盤とした地球表層圏システムの学際的研究に関わる大学・研究機関を横断する中核的研究拠点として、多様な背景を有する国内外の研究者との共同研究を推進し、世界的研究拠点としての役割を果たすと共に、次世代の大気海洋科学の発展に寄与する人材を育成することを目的とする。

本拠点の活動として、1) 2 隻の学術研究船による共同研究、2) 陸上研究施設を用いた共同研究、3) 気候モデルを用いた共同研究、および 4) 学際連携研究制度による共同研究を実施してきている。

2. 総合評価

(評価区分)

S：拠点としての活動が活発に行われており、共同利用・共同研究を通じて特筆すべき成果や効果が見られ、関連コミュニティへの貢献が多大であると判断される。

(評価コメント)

ボトムアップ型による学術研究船の運航や複数の大型プロジェクトの推進など、共同利用・共同研究拠点として広く海洋科学コミュニティを支え、当該研究分野において世界トップレベルの研究成果を上げている点が高く評価できる。

今後、海洋に関する観測・実験を中心とした基礎研究と気候に関する数値モデリング研究の統合による相乗効果が期待される。

中間評価結果

大学名	京都大学
研究施設名	霊長類研究所
拠点の名称	霊長類学総合研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

ヒトを含む哺乳類の分類群である霊長類に関する総合的研究を有機的・体系的に推進する。ヒトの本性を理解するためには、生物としてのヒトの理解、とりわけ進化の隣人であるヒト以外の霊長類との比較が欠かせない。こころ、体、暮らし、ゲノムを含む多様な観点から、霊長類の研究を推進し、ヒトとは何か、という問いに答えていくことを目的とする。

2. 総合評価

(評価区分)

S：拠点としての活動が活発に行われており、共同利用・共同研究を通じて特筆すべき成果や効果が見られ、関連コミュニティへの貢献が多大であると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として、文理融合型の総合霊長類学において世界をリードし、優れた研究成果を上げるとともに、若手の育成・支援にも注力するなど関連研究者コミュニティの発展に貢献している点が高く評価できる。

今後、飼養する個体数の増加に伴う施設の改善や国際化への対応などについて、拠点としての明確な実行計画を示すことにより、コミュニティにおける議論が活性化することが期待される。

中間評価結果

大学名	京都大学
研究施設名	生態学研究センター
拠点の名称	生態学・生物多様性科学の先端的共同利用・共同研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

生態学・生物多様性科学の発展を望む研究者コミュニティの要望に応えるべく、本研究センターに集約された知識・技術・設備をもとに多様な共同研究を推進し、将来を担う研究者を育成することを目的とする。

生態学・生物多様性科学の課題について、国内の研究者に向けて共同研究、研究集会、ワークショップを募集し、実施する。また、研究施設、研究サイト、研究資料の共同利用を推進する。ニュースレター、ホームページにより生態学・生物多様性科学の啓発に努める。

2. 総合評価

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として、野外研究・実験研究・理論研究の統合により、生態学及び生物多様性科学において世界的な研究成果を上げている点が評価できる。

今後は、公開講座や講演会等の充実を図り、得られた成果を外部に対して積極的に発信するとともに、大学院生を含めた若手の人材育成にも注力することが望まれる。

中間評価結果

大学名	京都大学
研究施設名	放射線生物研究センター
拠点の名称	放射線生物学の研究推進拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

放射線生物学の先端研究や研究技術開発の推進のため、全国の関連研究者との共同研究を行うとともに、放射線線源と実験設備の提供、研究資材や放射線生物学的実験技術の供与などによる共同利用活動を行い、我が国の放射線生物学研究者コミュニティの研究拠点としての役割を担う。また当該分野の人材育成と先端的情報の発信源として機能するため、国際シンポジウム、研修会等を開催する。

2. 総合評価

(評価区分)

S：拠点としての活動が活発に行われており、共同利用・共同研究を通じて特筆すべき成果や効果が見られ、関連コミュニティへの貢献が多大であると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として、放射線生物学の分野において世界的な研究成果を上げるとともに、社会に対する放射線リスクコミュニケーションも十分に果たしている点が高く評価できる。

今後、学生も含めた若手の人材育成に向けた取組を一層強化するとともに、所有する大型設備の稼働率向上に努めることが望まれる。

中間評価結果

大学名	京都大学
研究施設名	野生動物研究センター
拠点の名称	絶滅の危機に瀕する野生動物（大型哺乳類等）の保全に関する研究拠点
認定期間	平成 23 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

日本で唯一の野生動物保全研究の拠点を構築し、野生動物に関する研究を推進する。特に以下の 3 つの課題を推進する。

- 1) 絶滅が危惧される野生動物を対象とした基礎研究を推進する。また、基礎研究で得られた成果を生かし、野生動物の生息地での自然な暮らしを守る。
- 2) 動物園、水族館などの飼育施設での研究活動を促進し、生息域外における保全研究を推進する。
- 3) 国内外における野生動物保全の課題に対して、自然科学分野と人文社会科学分野の研究を含めた、学際的な国際共同研究を推進する。このような取り組みを通じて、野生動物保全分野に関わる新たな学問領域を創成する。

2. 総合評価

（評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

（評価コメント）

共同利用・共同研究拠点として、海外のカウンターパート組織や国内の動物園、水族館との連携を図るとともに、それらの組織における人材育成にも取り組むことにより、研究者コミュニティの発展に貢献している点が評価できる。

今後は、同大学の霊長類研究所（霊長類学総合研究拠点）との差別化と独自性の明確化を図るとともに、動物園や水族館等の学術基盤の強化・充実につながる一層の関与が望まれる。

中間評価結果

大学名	大阪大学
研究施設名	蛋白質研究所
拠点の名称	蛋白質研究共同利用・共同研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

多様な機能・構造・物性・生理機能を持つ蛋白質の基礎的、応用的研究を共同実施する拠点を形成し、蛋白質研究により我が国の生命科学を飛躍的に発展させることを目的とする。その目的を達成するため、大学やその他の研究者コミュニティから広く研究者を受け入れて共同利用・共同研究を実施すると共に、蛋白質研究所セミナーや蛋白質データベースを通じて蛋白質研究に関する情報発信を行う。

2. 総合評価

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として、蛋白質の構造解析による世界トップレベルの研究成果を上げるとともに、蛋白質科学会等の設立や世界蛋白質立体構造データベース事業の推進など、関連分野や研究者コミュニティの発展に貢献している点が評価できる。

今後は、構造解析以外の蛋白質科学も取り込むなど、研究手法の進展等に的確に対応できる方策について検討するとともに、蛋白質研究においてアジア・オセアニアの中核となるべく、国際的な活動を一層強化することが望まれる。

中間評価結果

大学名	鳥取大学
研究施設名	乾燥地研究センター
拠点の名称	乾燥地科学拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

目的：本拠点は、乾燥地における砂漠化や干ばつなどの諸問題に対処し、乾燥地における自然－社会系の持続性の維持・向上に資する研究を中核的研究教育拠点として推進し、乾燥地科学分野の研究者の利用に供することを目的とする。

概要：乾燥地科学分野の研究者と公募型の共同研究を推進し、基盤的、萌芽的分野の研究推進を図るとともに学術ネットワークの拡大及び乾燥地科学分野の学術データベース構築により、我が国全体の乾燥地科学分野における学術研究の発展に寄与する。

2. 総合評価

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として、乾燥地における砂漠化や干ばつなどの問題を総合的に科学する活動が順調に行われており、専門書の発行やグローバルネットワークの構築などを通じて、国内外の関連研究者コミュニティの発展に貢献している点が評価できる。

今後は、人員や予算など拠点としての体制の充実を図るとともに、ニーズが大きい海外への展開について、関係機関等と連携しながら強力に推進することが望まれる。

中間評価結果

大学名	岡山大学
研究施設名	資源植物科学研究所
拠点の名称	植物遺伝資源・ストレス科学研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

本拠点では、国内外研究者との共同研究の推進により、「様々な環境ストレス下での食糧生産を可能にするため、資源植物の環境適応性の解明とその応用、および関連分野の人材育成」を目的とする。本事業では、当研究所が保有するリソース（大麦及び野生植物系統、大麦ゲノム情報）から、様々な環境ストレスに関連した遺伝子の探索、単離、解析し、新たなストレス耐性植物の開発を目指すものである。

2. 総合評価

（評価区分）

S：拠点としての活動が活発に行われており、共同利用・共同研究を通じて特筆すべき成果や効果が見られ、関連コミュニティへの貢献が多大であると判断される。

（評価コメント）

共同利用・共同研究拠点として、オオムギなどの独自のリソースを活用して、植物遺伝資源・ストレス科学に関する世界トップレベルの研究成果を上げるとともに、関連学会等から寄せられた改善要望に誠実かつ迅速に対応するなど、関連研究者コミュニティの発展に貢献している点が高く評価できる。

不良な環境下における作物の生産は世界の食料問題解決に向けた大きなポイントとなることから、今後、特に若手を中心とする国内外の人材育成への貢献を期待したい。

中間評価結果

大学名	琉球大学
研究施設名	熱帯生物圏研究センター
拠点の名称	熱帯生物圏における先端的環境生命科学共同研究拠点
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

全国共同利用・共同研究施設として、サンゴ礁、マングローブ林、亜熱帯原生林等の野外フィールドや各種機器、実験圃場、大型水槽実験施設を用いて各種の公募共同利用研究を行うと共に、関連分野におけるプロジェクト研究を組織し、推進する。

2. 総合評価

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、今後、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待され、関連コミュニティへ貢献していると判断される。

(評価コメント)

熱帯・亜熱帯環境下に位置するという特徴を生かした、熱帯特有の生物圏の形成・維持の機構解明に係る共同利用・共同研究拠点として、特色ある研究成果を上げるとともに、所有する貴重な研究資源を活用して多数の研究者を受け入れ、関連分野や研究者コミュニティの発展に貢献している点が評価できる。

今後は、拠点を構成する3施設（西原、瀬底、西表）の有機的連携を強めて、拠点としてのミッションの明確化を図るとともに、国内外の関連機関との連携を強化して多様な研究活動を展開することが望まれる。

中間評価結果

拠点の名称	海洋生物学研究共同推進拠点（ネットワーク型）
大学名 （研究施設名）	筑波大学（下田臨海実験センター）【中核機関】 東京大学（海洋基礎生物学研究推進センター）
認定期間	平成 22 年度～平成 27 年度

1. 拠点の目的・概要

筑波大学下田臨海実験センターと東京大学海洋基礎生物学研究推進センターとによる全国共同利用・共同研究連携拠点「海洋生物学研究共同推進拠点（JAMBI0）」を核として、戦略研究、次世代開拓研究、国際連携、学術成果普及の各事業を実施し、我が国の当該分野の研究推進を図る。

2. 総合評価

（評価区分）

B：拠点としての活動は行われているものの拠点の規模等と比較して低調であり、今後、作業部会からの助言や関連コミュニティからの意見等を踏まえた適切な取組が必要と判断される。

（評価コメント）

共同利用・共同研究拠点として、全国の海洋生物学者を支援し、当該分野を牽引するとともに、国際連携における我が国の窓口機関として機能している点については、一定の評価ができる。

一方、共同利用・共同研究拠点として 2 機関がネットワークを組んでいる必然性が明確となっていないことから、今後、2 機関の有機的連携を強めて、相乗効果の高いネットワーク型拠点を目指すことが必要である。